

病害虫発生予察情報（10月予報）

令和元年9月25日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (10月の県平均平年値)	予報の根拠
イネ	トビイロウンカ	発生量：多	9月上～下旬発生量：多（+） 9月の成虫誘殺数：並（±） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並（±）
ダイズ	べと病	発生量：少	9月上旬発生量：少（-） 気象予報：気温：高い（-） 降水量：並（±）
	ハスモンヨトウ	発生量：やや少 (過去8年の平均寄生株率1.2%)	9月上旬発生量：少（-） 9月トラップ捕獲数：少（-） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並（±）
	カメムシ類	発生量：やや少 (過去9年の平均寄生株率10.3%)	9月上旬発生量：少（-） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並（±）
ウンシュウミカン	青かび・緑かび病	発生量：やや多 (落果発病数0.5果/樹)	気象予報：気温：高い（+） 降水量：並（±）
	ミカンハダニ	発生量：やや少 (寄生葉率1.6%)	9月上中旬発生量：少（-） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並（±）
中晩柑類	かいよう病	発生量：多 (発病度(果)0.6)	9月中旬発生量：やや多（+） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並（±）
果樹全般	果樹カメムシ	発生量：やや多 (西部地域では多)	スギ・ヒノキ寄生数：少（-） ヒノキ毬果吸汁痕数：多（+） 9月1～3半旬誘殺数：並（±） ただし西部地域では多（+） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並（±）
チャ	チャハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数0.9頭/1.25m ²)	9月上中旬発生量：少(発生なし)（-） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並（±）
	チャノコカクモンハマキ	発生量：並 (寄生虫数0.7頭/1.25m ²)	9月上中旬発生量：少（-） 防除員からの情報：やや多（+） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並（±）
	カンザワハダニ	発生量：多 (寄生葉率1.3%)	9月上中旬発生量：やや多（+） 9月上中旬カガリガニ発生量：少（+） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並（±）

作物名	病害虫名	予報 (10月の県平均平年値)	予報の根拠
トマト	葉かび病・ すすかび病	発生量：やや少 (発病株率13.0%)	9月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	黄化葉巻病 (タバコ コナジラミ)	発生量 黄化葉巻病：やや少 (発病株率2.8%) コナジラミ類：やや少 (寄生株率6.9%)	9月中旬発生量：少(発生なし)(-) 9月中旬のコナジラミ類発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや少 (寄生株率0.5%)	9月中旬発生量：少(発生なし)(-) 9月トラップ ^o 捕獲数：少(-) 気象予報：気温：高い(+)
ダイコン	コナガ	発生量：やや少 (寄生株率0.1%)	9月トラップ ^o 捕獲数：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
ネギ (シロネギ)	黒斑病・葉枯病	発生量：多 (発病株率7.4%)	9月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	ネギアザミウマ	発生量：やや少 (寄生株率39.7%)	9月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	シロイチモジヨトウ	発生量：並 (寄生株率1.8%)	9月中旬発生量：少(-) 防除員からの情報：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	ネギハモグリバエ	発生量：並 (被害株率34.7%)	9月中旬発生量：やや少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
レタス (非結球レタス を除く)	ハスモンヨトウ	発生量：やや少 (寄生株率0.1%)	9月トラップ ^o 捕獲数：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
イチゴ	炭疽病	発生量：多 (発病株率1.1%)	9月発生量：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+)
	うどんこ病	発生量：やや少 (発病株率1.4%)	9月発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(-)
	ハダニ類	発生量：やや多 (寄生株率11.2%)	9月発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+)
	ハスモンヨトウ	発生量：並 (寄生株率0.7%)	9月発生量：並(±) 9月トラップ ^o 捕獲数：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
作物全般	オオタバコガ	発生量：やや多	9月の成虫誘殺数：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年（静岡県過去の10年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県過去の10年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の1か月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（+）、少発要因の場合は（-）を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は
こちらで
検索！



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【イネ】

●トビイロウンカ

予報の根拠

- ・ 9月上～下旬の巡回調査では、本種の平均寄生株率 0.50 頭/株であり（平成 0.24 頭/株）、平成より多かった。特に、県内沿岸部では被害が多発しているほ場があるため、注意を要する。
- ・ 9月第3半旬時点の県内3カ所の予察灯では、本種の誘殺数は平成並で推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平成並だが、気温は平成より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 気温が高い場合に急増することがある。葉色に注意し、水田内で坪状に葉が黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が多い場合は薬剤防除を行う。

【ダイズ】

<生育の概況等>

生育は平成より遅い状況である。

●べと病

予報の根拠

- ・ 9月上旬の巡回調査では、平均発病株率 0.5%（平成 19.7%）と平成より少ない発生であった。落葉が見られるような、激しい被害ほ場は確認されなかった。
- ・ 本病は比較的冷涼（15～20℃）で雨の多いときに発生する。1か月予報では、降水量は平成並だが、気温は平成より高いため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 常発ほ場においては、来年以降の作付けでは、密植を避けて株間の風通しを良くする。
- ・ 発生が多い圃場では薬剤散布を行う。薬剤の選択にあたっては収穫前日数に注意する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ 9月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は 5.8%（平成 12.7%）と平成より少なかった。
- ・ フェロモントラップの調査では、9月の成虫誘殺数は平成より少なく推移している。例年、10月が発生のピークとなる。
- ・ 1か月予報では、降水量は平成並だが、気温は平成より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 若齢幼虫による被害葉（白または淡褐色に透けてみえる）を確認した場合は速やかに防除を実施する。

●カメムシ類（ミナミアオカメムシ、ホソハリカメムシ、イチモンジカメムシ）

予報の根拠

- ・ 9月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.0%（平年1.8%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並だが、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。
- ・ 近年、ミナミアオカメムシの発生が増加している。

防除対策

- ・ ほ場内の発生に注意し、発生を確認した場合は速やかに薬剤防除を実施する。

【ウンシュウミカン】

<生育の概況等>

生育は平年並の地域が多いが、4～7日程度遅い地域もある。

●青かび・緑かび病

予報の根拠

- ・ 1か月予報によると、降水量は平年並であるが、気温は平年よりも高いため、果樹園における本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 樹上発病果や発病した摘果果実は、園内の菌密度を高めるため、園外に持ち出して処分する。
- ・ 果実の傷から病原菌が侵入するため、果実に傷がつかないように丁寧に収穫する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 9月上中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は2.7%（平年4.2%）と平年より少ない発生であった。
- ・ 1か月予報によると、降水量は平年並であるが、気温は平年よりも高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 着色期に寄生すると果実の外観が損なわれることから、発生に注意し、多発している場合は防除を行う。

<その他の病害虫>

●褐色腐敗病

- ・ 本病原菌は土壌中に生息し、雨による泥のはね上がりなどで遊走子が果実に侵入する。
- ・ 10月に強い降雨があると感染・発病しやすいので、降雨前に防除を行う。過去に発生した園では特に注意が必要である。
- ・ 園内の排水溝の整備、通風を良くするなど地表面の乾燥に努める。マルチ栽培や結果枝のつり上げなどで果実を地表面から離す。

【中晩柑類】

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 9月中旬の巡回調査では、果実の平均発病度は0.7（平年0.5）と平年よりやや多かった。
- ・ 1か月予報によると、降水量は平年並であるが、気温は平年よりも高いため、本病の発生を助長する。
- ・ 9月8～9日に接近した台風15号の強風雨により、県東部・伊豆地域を中心に感染が拡大した可能性がある。

防除対策

- ・ 10月以降は果実では発病しないが、強風雨により葉に感染すると翌年の有力な伝染源となるため、病斑が形成された夏秋梢は直ちに切除する。
- ・ 今後、台風が襲来するとさらに感染が拡大する恐れがある。台風通過後に薬剤散布しても、すでに感染した組織内の病原菌にはほとんど効果がないので、襲来前に予防散布を行う。

【果樹全般（カキ・ウンシュウミカン・キウイフルーツ）】

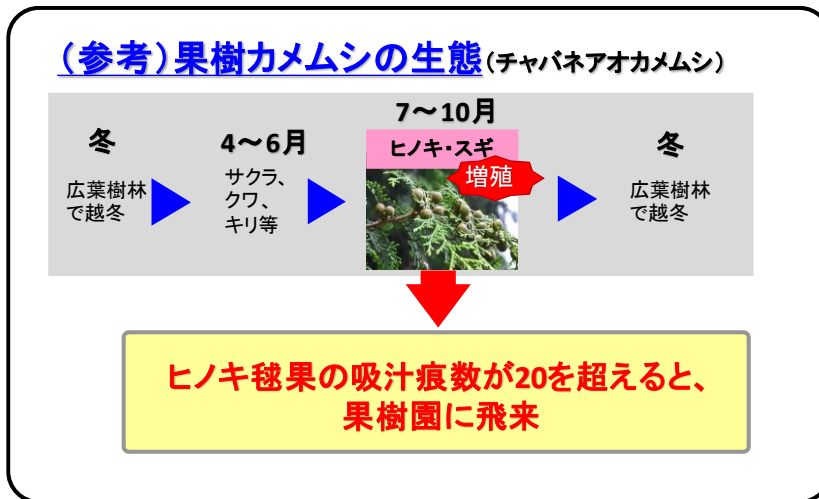
●カメムシ類（チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ・クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・ 県内6カ所に設置されたフェロモントラップにおいて、9月第1～3半旬の果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）の合計誘殺数の平均は77.9頭/箇所（平年52.5頭）と平年より多かった。地域別にみると、東部（166.2頭/箇所、平年180.3頭）と中部（27.6頭/箇所、平年24.7頭）ではほぼ平年並、西部93.9頭/箇所（平年36.6頭）では平年より多かった。
- ・ 予察灯における9月第1～3半旬の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシは535.3頭/箇所（平年241.8頭）、ツヤアオカメムシは239.0頭/箇所（平年121.2頭）と平年より多かった。
- ・ カメムシ類の繁殖場所であるスギ・ヒノキにおける9月上中旬の叩き落とし調査では、果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）の平均寄生数は3.1頭（平年5.4頭）と平年より少なかった。
- ・ カメムシ類の好適な餌であるヒノキ毬果において、毬果1個あたりのカメムシ類による吸汁痕数が20を超えると、スギ・ヒノキからカメムシ類が離脱し餌を求めて果樹園へ飛来する（下図参照）。9月上中旬のヒノキ毬果におけるカメムシの平均吸汁痕数は、24.3（平年12.0）と多く、カメムシの離脱が始まっていると考えられる（下図参照）。

防除対策

- ・ フェロモントラップ及び予察灯による誘殺数は、病害虫防除所ホームページを参照する。
- ・ スギ・ヒノキ林付近の果樹園では10月以降も飛来する可能性があるため、ほ場の発生状況をよく観察し発生がみられれば防除を行う。



【チャ】

<生育の概況等>

9月上中旬の巡回調査時では、いずれの茶園も秋芽生育期であった。秋冬番の摘採はまだ始まっていなかった。

●チャハマキ

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生虫数 0.4 頭/1.25 m²）。
- ・1か月予報では、降水量は平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・前の世代（9月上旬）に被害が見られた茶園では、摘採・整枝後早めに防除を行う。

●チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、平均寄生虫数は0.24 頭/1.25 m²（平年 0.45 頭）で平年に比べ少なかった。一方、複数の防除員から、平年に比べ発生がやや多い報告があった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・前の世代（9月上旬）に被害が見られた茶園では、摘採・整枝後早めに防除を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、摘採面の平均寄生葉率は3.6%（平年 2.5%）と平年に比べやや多かった。
- ・天敵のカブリダニ類の発生は、茶園4カ所の叩き落とし調査で平均0.3 頭（平年 0.7 頭）と、平年に比べ少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・発生状況をよく観察し、発生の多い茶園では整枝後に防除を行う。

<その他の病害虫>

●炭疽病

- ・最終摘採後に生育する新芽に対する防除が重要である。秋芽収穫ほ場では、新芽生育期に半日以上続く降雨があった場合に防除を行わないと、10～12月にも本病の発生を見る場合がある。

●褐色円星病

- ・夏～秋に感染し緑斑症状を示した葉が、翌春になって落葉を引き起こす。よって、春になってからの防除では手遅れである。今春、多発が見られたほ場で9月以降に殺菌剤を散布していない場合には、10月中旬に1回防除を行っておくと良い。

●ナガチャコガネ

- ・一番茶で本種による被害が見られた茶園では、10月下旬から11月にかけて畝間から雨落ち部を掘り、幼虫が地表面近くに上がってきたのを確認した上で、薬剤の土壌灌注処理を行う。
- ・薬剤処理は、降雨後に行うと効果的である。

●チャトゲコナジラミ

- ・9月に成虫の発生が目立った茶園では、秋整枝終了後に行うカンザワハダニの防除時に、両種に登録のある薬剤を用いて防除する。防除は幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くように散布する。また防除前に裾刈りを行うと薬剤が茶株内部まで届き、防除効果が高まる。

【トマト】

<生育の概況等>

生育は平年よりやや遅い～やや早い状況で、地域によってばらつきがある。

●葉かび・すすかび病

予報の根拠

- ・9月中旬の中遠地区での巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率8.4%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並であるため、本病の発生をやや助長する（菌の生育適温は葉かび病20～25℃、すすかび病26～28℃で、どちらも多湿条件で発病が多くなる）。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・被害葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。
- ・葉かび病とすすかび病は肉眼では見分けが難しいが、本県では、秋期はすすかび病の発生が多い傾向がある。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・ 9月中旬の中遠地区での巡回調査では、本病の発病は認められなかった（平年発病株率 1.0%）。
- ・ 媒介虫のコナジラミ類の発生も認められなかった（平年寄生株率 5.1%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、コナジラミ類の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
- ・ 脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・ タバココナジラミに対して以下の防除を徹底する。

施設開口部に防虫ネット（目合い 0.4mm 以下）を設置し、侵入を抑制

新芽への成虫の寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ 9月中旬の中遠地区の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年寄生株率 0.6%）。
- ・ フェロモントラップの調査では、9月の成虫誘殺数は平年より少なく推移している。例年、10月が発生のピークとなる。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 施設開口部に防虫ネットを設置し、侵入を抑制する。
- ・ 本種は中齢以降では薬剤の効果が悪いため、ほ場内での発生に注意し、若齢幼虫の防除に努める。

【ダイコン】

●コナガ

予報の根拠

- ・ フェロモントラップの調査によると、9月の成虫誘殺数は平年より少なく推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並だが、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ ほ場内の発生に注意し、初期防除に努める。

<その他の病害虫>

●軟腐病・黒腐病・黒斑細菌病

- ・ 高温・多雨の条件で発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並であることから、本病の発生を助長する。
- ・ 生育の衰えは発生を助長するため、排水に注意し、適切な管理に努める。
- ・ 病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に防除を行う。特に、葉柄基部

から侵入した場合は根部に影響を与え、商品価値を落とすこともあるため注意する。

●モザイク病（アブラムシ類）

- ・モザイク病の発生がみられた場合は、早めに発病株を抜き取り土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分するとともに、アブラムシ類の防除を行う。

【ネギ（シロネギ）】

<生育の概況等>

生育は、平年並からやや遅れている。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・9月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は9.6%（平年4.2%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並だが、気温は平年より高いため、黒斑病は発生が助長される（黒斑病菌の分生子の発芽・形成適温 24～27℃、葉枯病多発気温 15～20℃）。

防除対策

- ・本病は多湿条件で多発するため、植え溝の両端に排水用の溝を切るなどして、ほ場排水を良くする。また、肥料の過不足により発生しやすいため肥培管理を適切に行う。
- ・薬剤防除は予防散布や初期発生時の薬剤散布の効果が高い。このため、各薬剤の使用回数に注意し防除する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は11.2%（平年31.5%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・例年、9～10月は本種の発生程度が高まる。多発するとネギの生育が遅れるため、発生初期に防除する。発生が多いほ場では早めに防除を行う。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

- ・9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率1.2%（平年3.9%）と、平年に比べ発生は少なかった。
- ・防除員からの情報では、一部地域で平年より発生がやや多い。
- ・1か月予報では、降水量は平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ほ場内を観察し、葉に卵塊（数粒～数十粒の卵の塊で灰白色の毛に覆われている）を見つけた場合は、早急に除去する。
- ・多発ほ場では、定期的に薬剤防除を実施する。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・ 9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は36.0%（平年42.0%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 本種が多発すると生育が遅れるため、発生が見られるほ場では早期に防除する。

【レタス(非結球レタスを除く)】

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ フェロモントラップの調査では、9月の成虫誘殺数は平年より少なく推移している。例年、10月が発生
のピークとなる。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並だが、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 本種は中齢以降では薬剤の効果が悪いため、ほ場内での発生に注意し、若齢幼虫の防除に努める。

<その他の病害虫>

●ビッグベイン病

- ・ 本病は土壌伝染性のため、常発地では土壌消毒を行う。
- ・ 本病の発生が確認された地域からは土壌の移動をしない。
- ・ 発病ほ場で使用した農機具は十分水洗いし、消毒する。

●斑点細菌病

- ・ 本病は降雨により発病が助長されるため、降雨後はなるべく早く薬剤を散布して予防に努める。
- ・ 発病葉は摘み取って、ほ場外に持ち出して処分する。

●べと病

- ・ 初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。特に、育苗期に本病と疑われる症状があった場合や、
周辺でべと病が多発している場合など、感染源が多いと思われるほ場では注意する。
- ・ 育苗期の防除を徹底し、発病株を本ほ場に定植しないよう苗を厳選する。
- ・ 発病葉は摘み取って、ほ場外に持ち出して処分する。

●モザイク病(アブラムシ類)

- ・ 感染時期が早いほど被害が大きいため、ウイルスを伝搬するアブラムシ類の薬剤防除は、特に育苗期や定
植後の生育前半に徹底して行う。
- ・ 発生がみられた場合は、早めに発病株を抜き取り土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適
切に処分する。

●ナモグリバエ

- ・ 常発地域では、育苗期後半または定植時に薬剤を処理する。
- ・ 定植後は初期発生に注意し、発生を確認した場合は薬剤防除を行う。

【イチゴ】

<生育の概況等>

苗の生育は平年並～遅く、地域によってばらつきがある。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回では、平均発病株率は1.3%（平年0.9%：過去7年）で、平年よりやや多い発生であった。病害虫防除員からの9月の報告によると各主要産地における発生量は、平年よりやや多い～多い発生であった。
- ・ 1か月予報によると、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 本病原菌は水滴の飛散等により伝染するため、株元灌水するなどして、できるだけ水の跳ね返りがないようにする。
- ・ 発病株は見つけしだい周辺部も含めて抜き取りビニール袋に入れ処分する。
- ・ 今後、開花～着果期頃、株に負担がかかると発病が増える可能性がある。
- ・ 今後の温室内の温度管理に注意し、高温にならないようにする。特に、ハウスのビニール被覆後の管理に注意する。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回では、平均発病株率は4.6%（平年4.9%：過去8年）で、平年並の発生であった。病害虫防除員からの9月の報告によると各主要産地における発生量は、平年並～やや少ない発生であった。
- ・ 本病は20℃前後の気温で発生しやすい。1か月予報によると、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 予防散布を中心に定植初期に防除を行う。特に、育苗期に発生がみられたほ場では防除を徹底する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回調査における平均寄生株率は、東部地域では0.8%（平年5.1%：過去8年）、西部地域では1.3%（平年4.6%：過去8年）と平年より少ない発生であったが、中部地域では40.0%（平年15.8%：過去8年）と平年より多い発生であった。病害虫防除員からの9月の報告によると各主要産地における発生量は、ほぼ平年並であった。
- ・ 1か月予報によると、気温は平年より高いと予想され、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 近年、本ほでの発生が多い。天敵を利用する場合は、天敵導入時のハダニの密度が重要である。このため、防除を徹底するなどして、天敵導入時にはハダニの密度が高くないようする。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・フェロモントラップの調査によると、9月の誘殺数は平年より少なく推移している。例年10月が発生のピークとなる。
- ・病害虫防除員からの9月の報告によると、ほぼ平年並の発生であった。
- ・1か月予報によると、降水量は平年並であるが、気温は平年よりも高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。初期発生に注意し、若齢のうちに防除を行う。

【作物全般】

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・浜松市のキク産地におけるフェロモントラップの誘殺数は、平年並で推移している。
- ・1か月予報では、降水量は平年並だが、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

3 季節予報

● 1 か月予報 (東海地方 令和元年9月19日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 9月21日から10月20日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率70%です。2週目は、高い確率70%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1 か月	気温	10	20	70
1 か月	降水量	30	40	30
1 か月	日照時間	30	30	40
1 週目	気温	10	20	70
2 週目	気温	10	20	70
3～4 週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

- 1 か月 : 9月21日(土)～10月20日(日)
1 週目 : 9月21日(土)～9月27日(金)
2 週目 : 9月28日(土)～10月4日(金)
3～4 週目 : 10月5日(土)～10月18日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--